

## とうきょう すくわくプログラム活動報告書③

### 1. 活動のテーマ

#### <テーマ>

音楽に親しむ

#### <テーマの設定理由>

毎日、賛美歌を始めとして様々な歌を何曲も楽しんで歌っている

保護者によるハンドベル演奏やコーラスを聴く機会を年に数回設けている

### 2. 活動スケジュール

- ・楽しく歌う経験を繰り返す→歌だけではなく、手拍子やステップをとったりしてみる。
- ・耳を傾ける→自分の声、友だちの声、きれいな音、正しいことなど、心地よい音に「なんだろう？」と、耳を傾ける経験をたくさんする。
- ・“自分”の楽しい気持ちだけではない。となりの人の声に耳を傾けて一緒に歌う。  
特に、隣の人の声に耳を傾けることがとても苦手な子どももいる。誰かの声を聴きながら歌ったら楽しいという経験をたくさん重ねていく。
- ・保護者によるイングリッシュハンドベルの演奏やコーラスを聴く。
- ・保護者と一緒に守る母の日礼拝（5月）、親子礼拝（6月）、さんび礼拝（2月）、また祖父母を招待するひなまつり（3月）では参加のお家の人たちに歌や演奏を披露し、年齢ごとの“持ち味”を楽しんで聴いていただく。

### 3. 探究活動の実践

#### <活動の内容>

**満3歳・年少・年中児**：ピアノに合わせて心を合わせて歌う

入園して最初に歌うさんびか「ことりたちは」

短い曲だが4番までの歌詞を覚えるのに毎年苦労している様子

そこで、1番2番を年少・満3歳児が、3番4番を年中児が、と“リレー”して歌ってみることに…

歌い終わったら座る、歌う時には立つという連携がだんだん上手になり、それぞれの歌声を聴きあう姿も見られるようになった

学年末には教師も入りみんなで手をつないで輪になって歌ったが、子どもたちの成長を感じる嬉しいひとときであった



三学期 終業礼拝 輪になって歌いました



**年中児**：お手玉を使ってリズムカルに

三学期、お手玉遊び

輪になって座り“あんたがたどこさ”を歌いながら“さ”の時にお手玉を隣の友達に渡していくゲームをする

外向きになってお互いの手元が見えなくても上手に渡せるようになったので、ひなまつりで祖父母にも見ていただいた、大成功

**年長児の音に親しむ経験のため** : 自分の声・保育者自作の太鼓・カスタネット・イングリッシュハンドベル

・1学期。“バスごっこ”を歌ったところ、子どもたちはとても気に入った。原曲にはない、4番の歌詞も皆で考えて作り、大変楽しい。けれども、楽しくなればなるほど、どんどんテンポが速くなり、ピアノ伴奏とも、周囲の友だちとも揃わなくなる。これでは、みんなで歌っているのではなく、“自分が楽しい！”だけである。

・保育者が、工作用に置いてある空き箱を使い、即席の太鼓を作ってみる。耳を澄ますと聴こえるくらいの音で歌に合わせて叩いてみる。その音に合わせてようとする子どもたち。段々みんなで歌って楽しい歌になっていく。家族も参加する親子礼拝の集いで、歌を披露し、とても嬉しかった。

・自分たちもリズムをとりたくなってきて、「やりたい」と皆が言う。

幼稚園にあるカスタネットをだし、歌に合わせてリズムをとり、とても楽しい。

・二学期になり、運動会でポイントごとにカスタネットを打つ競技に親子で参加。大変楽しかった。そして運動会のお土産はカスタネット。大喜びの一日となる。

・カスタネットを打ちながらの歌の演奏を何回か保護者の前で披露する機会があった。嬉しい経験。また、保護者によるコーラスを聴き、ハンドベルの音色に耳を傾けることも経験できた。

・三学期。ハンドベルの演奏を聴いた後、自分たちもやってみたいとの声が出てきた（この声が出てくるのを待っていた！）。ハンドベルの扱いについてきちんと聞き、落ち着いた気持ちでベルに向かう。講師の方に来ていただき、親子でハンドベルのワークショップに参加、みんなで一音ずつ、ドレミファソラシドを奏でることができた。



親子でワークショップ  
初めて鳴らせたと喜ぶ子も

一学期 講習を受ける



三学期 子どもたちの前で演奏

#### 4. 振り返り

##### <振り返りによって得た先生の気づき>

自分が自分が！の気持ち強い子どもが多い。逆に、その勢いが本当はうれしくないのだが、ただ黙ってやり過ごそうとする子どもたちもいる。これではクラスとしての育ちに偏りが出てくる。

今回のカスタネットやハンドベルを通じての演奏の喜びから、また、前の項目のメダカの世話を自分たちで考えて、上手くいく経験を重ねたことから、年長の子どもたちは、他者の声に耳を傾ける姿がたくさん生まれてきた。とても嬉しい一年となった。

他者の意見に「それいいね」と言えること。大きすぎる声には、「その声は大きすぎる！」と言えること。言われたら「あっ ごめん」と思えること。

うれしいことになるように、自分の気持ちを素直に出せる生活をする力が、一人一人についた。

毎日の生活の中で子ども同士のやり取りがなされるだけではなく、今回のように長いスパンで取り組む経験が力になっていったことは、保育者にとってもこれからの保育を考える、よき学びとなった。